

## 体験学習が他者理解に及ぼす効果 — 高齢者疑似体験及び世代間交流の効果 —

笹島浩子・神川康子・永井敏美\*・浦上紀子\*\*

### Effect of Experiential Learning to Understand Others — Effect of Simulated Experience of Being Aged and Communication with Different Generations —

Hiroko SASAJIMA, Yasuko KAMIKAWA, Satomi NAGAI  
and Noriko URAKAMI

キーワード：体験学習，異世代，福祉教育，高齢者疑似体験，高齢者交流，乳幼児交流

Key word : experiential learning, different generations, welfare education, simulated experience of being aged, communication with elder people, communication with infants

#### 1 緒言

現在、私たちは経済的・物質的に豊かな生活を送っている。しかし、その反面、核家族化や少子化による家族の規模の縮小化、地域の人間関係の希薄化等が進み、多様な他者と交流する機会が減少している。また、多くの青少年犯罪やいじめ等の実態にもみられるように<sup>1)</sup>、人と関わることを苦手とし、他者に対する理解や思いやりに欠ける子どもが増えているとも言える。このようななか、学校においても、家庭や地域と連携しながら教育活動を通して自立心や思いやりの心を育て、共に助け合って生活する意義を理解させ、豊かな人間性を育てていくことは現代社会に課せられた極めて重要な課題である。

福祉の心の核になるものは「自分も他者も共に生きている」ことに対する理解である。このことから、他者に働きかける源となるものは相手に対する思いやりの気持ちであって、それが他者の立場を認め、助け合い、励まし合う行動になって現れてくると考えられる。

本研究では、そのような福祉の心はより多くの他者との関わりの中において育まれるものであると考えた。中でも異年齢・異世代との交流によって子どもたちの福祉観はどのように変化するのかを分析する。そして、学校における福祉教育をより効果的なものにしていくために、福祉教育を学校教育の中にどのように位置づけ、展開していけばよいかを検証したい。

#### 2 研究方法

平成9年6月～12月にかけて、小学校家庭科、中学校技術・家庭科、高等学校家庭科や大学の授業において、福祉に

関する体験学習を取り入れた。その事前と事後に、児童・生徒を対象にアンケート調査を行った。調査項目については、表1に示したとおりである。福祉に関する体験学習の内容は、高齢者疑似体験、高齢者福祉施設訪問交流、児童福祉施設訪問交流の3種類である。調査協力校は、小学校1校（富山市）、中学校1校（富山市）、高等学校1校（東砺波郡）、大学1校（富山市）とした。なお、小学生は6年生、中学生は2年生、高校生は2年生、大学生は演習受講者の2～4年生を調査対象とした。体験学習の流れを表2に示す。

高齢者疑似体験とは、車椅子に乗ったり、白内障体験ゴーグル、おもりなどの身体的ハンディキャップをつけたりして、加齢に伴う高齢者の身体的・心理的变化を疑似体験するもので、小学生（2クラス）、中学生（2クラス）、高校生（3クラス）、大学生（演習クラス）、計411名を対象に行った。

高齢者福祉施設訪問交流とは、地域の高齢者福祉施設（今回は老人保健施設）をクラス単位（約40名）で訪問し、高齢者と交流するもので、高校生118名（3クラス）を対象に行った。2単位時間（100分）中、最初の20分間は施設の方からの説明を聞き、その後、前半約50分間は1対1で主に会話をしながら交流を深め、後半は全員でゲーム等を行った。

児童福祉施設訪問交流とは、地域の児童福祉施設（今回は保育所）をクラス単位（約40名）で訪問し、幼児と交流するもので中学生（3クラス）、高校生（3クラス）、計234名を対象に行った。1単位時間（50分）中、生徒たちは幼児と自由に遊び、交流した。

各体験学習の対象者の内訳は表3の通りである。集計にはアンケート調査解析パッケージ<sup>2)</sup>を用いてコンピュータ処

\* 富山県立井波高等学校

\*\* 富山大学教育学部附属中学校

表1：調査項目

	体 験 前	体 験 後
高 齢 者 疑 似 体 験	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祖父母同居の有無</li> <li>・ 別居祖父母との交流頻度</li> <li>・ 他者に対する援助経験の有無</li> <li>・ 高齢者に対するイメージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シニア体験で怖かったり不安だったこと</li> <li>・ 他者に対する援助意欲の有無</li> <li>・ 高齢者に対するイメージ</li> <li>・ 他者理解度</li> <li>・ シニア体験をまたしたいか</li> <li>・ バリアフリーについて思うこと</li> <li>・ 自由筆記</li> </ul>
高 齢 者 福 祉 施 設 訪 問 交 流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 祖父母同居の有無</li> <li>・ 別居祖父母との交流頻度</li> <li>・ 他者に対する援助経験の有無</li> <li>・ 高齢者に対するイメージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高齢者との交流で印象的だったこと</li> <li>・ 他者に対する援助意欲の有無</li> <li>・ 高齢者に対するイメージ</li> <li>・ 他者理解度</li> <li>・ 高齢者との交流をまたしたいか</li> <li>・ 自由筆記</li> </ul>
児 童 福 祉 施 設 訪 問 交 流	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身の回りに乳幼児がいるか</li> <li>・ 他者に対する援助経験の有無</li> <li>・ 乳幼児に対するイメージ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼児との交流で印象的だったこと</li> <li>・ 他者に対する援助意欲の有無</li> <li>・ 乳幼児に対するイメージ</li> <li>・ 他者理解度</li> <li>・ 幼児との交流をまたしたいか</li> <li>・ 自由筆記</li> </ul>

表2：体験学習の流れ

学校段階	クラス名	⇒ ⇒ 体験学習の流れ ⇒ ⇒
小学生	1組	高齢者疑似体験
	2組	
中学生	1組	高齢者疑似体験
	2組	児童福祉施設訪問交流
	3組	児童福祉施設訪問交流
	4組	児童福祉施設訪問交流
高校生	1組	児童福祉施設訪問交流
	2組	児童福祉施設訪問交流
	3組	児童福祉施設訪問交流
大学生	演習	高齢者疑似体験

表3：調査対象者の内訳（単位：人）

高齢者疑似体験

学校段階	性別	男	女	計
小学校		42	37	79
中学校		39	39	78
高校		57	61	118
大学		42	94	136
計		180	231	411

高齢者福祉施設訪問交流

学校段階	性別	男	女	計
高校		57	61	118

児童福祉施設訪問交流

学校段階	性別	男	女	計
中学校		58	58	116
高校		57	61	118
計		115	119	234

理を行い、また有意差の検定にはカイ自乗検定を用いた。

### 3 結果と考察

#### (1) 高齢者疑似体験の効果

##### ① 高齢者疑似体験前後での変化

三世代同居家族の割合は、全国平均で15.2%（1998年）、

富山県の平均で24.5%（1996年）である<sup>3)</sup>。高齢者疑似体験（以下シニア体験とする）の調査対象者では、祖父母と「同居している」割合は全体の55.7%であり、調査協力高等学校が郡部であったために「同居していない」割合をやや上回った。つまり、学校段階別にみると、富山市内にある小、中学校では同居率がやや低く小学校46.7%、中学校38.4%であ

るが、郡部にある高等学校では78.8%と同居する割合が非常に高かった。このことから、郡部より富山市内の方が核家族化が進んでいることは明らかであるが、比較的、同居高齢者がいる家庭は多いと言える。

別居している祖父母との交流頻度を図1に示した。別居している祖父母との交流頻度と学校段階との間には、0.1%の危険率で有意な関連がみられた。別居している祖父母と月に1～2回以上（毎日、週1～2回、月1～2回）交流している割合は、小学生76.1%、中学生61.8%、高校生24.3%と学校段階が上がるにつれて減少する傾向がある。しかし、大学生においては40.5%と高校生よりも高い割合を占めており、大学生になると主体的に交流する気持ちが生まれてくると思われる。

別居祖父母との交流頻度が最も高い小学生では、図2のシニア体験前の高齢者イメージに示したように「やさしい」93.7%、「ものしり」82.3%、「明るい」50.6%等、中、高、大学生と比較して高齢者に対しプラスイメージを持つ割合が高い。また、その割合は中、高と学校段階があがり、交流頻度が低くなるにつれて少なくなる傾向がみられ、先行研究と同様の結果が得られた<sup>4)</sup>。大学生についても、高校生に比べて別居祖父母との交流頻度は高いものの、「おそい」59.6%、「がんこ」55.9%、「弱い」53.7%等のマイナスイメージを持つ割合が小、中、高校生よりも高かった。これは、学校段階が上がるにつれて祖父母の年齢が高くなることが一因であると考えられる。

シニア体験後は、高齢者イメージが、小学生で「大切」「友達多い」「弱い」「自分勝手」、中学生で「暖かい」「弱い」「おそい」「がんばる」、高校生で「弱い」「暖かい」、大学生で「弱い」「大切」「がんばる」等が増える傾向が認められた。小学生、中学生、高校生、大学生全体のシニア体験前後の高齢者イメージの変化についてみても、前後で最も著しい変化があったのは「弱い」で33.5%から

52.5%へと増加し、同様に「がんばる」も17.8%から30.7%へと増加した。

図3にシニア体験をした後の小学生、中学生、高校生、大学生411人の他者に対する援助意欲を示す。体験前に、他者に対する援助経験をきいたところ、「困っている友達を助けたことがある」64.6%、「道に落ちているゴミを拾ったことがある」51%、「乗り物などでお年寄りや赤ちゃんを抱っこした人に席を譲ったことがある」47.4%等の割合が高かった。しかし、シニア体験後では「乗り物などでお年寄りや赤ちゃんを抱っこした人に席を譲ろう」68.1%、「お年寄りの手伝いをしよう」58.5%、「目の不自由な人を援助しよう」55.2%等、高齢者や障害者に対する援助をしようと感じている割合が高い。

また、シニア体験を通してバリアフリーについて何らかの興味・関心を持った割合が96.5%を占めた。その内容は図4のバリアフリーに対する関心について示したように、生活道具や街の環境について「これではお年寄りに使いにくいだろうと思うことが多くなった」と回答した割合が最も多く69.6%であった。このことから、単に自分の立場からバリアフリーについて興味・関心を持っただけでなく、高齢者の立場になって考えるようになったことも伺える。

シニア体験を通して他者の気持ちがわかるようになったかを4段階で自己評価してもらった結果、「すごくわかるようになった」が小学生～大学生までの全体の14.7%、「少しわかるようになった」が79.2%で、9割以上の児童・生徒に他者理解が深まる傾向が見られた。さらに学校段階別にみると、図5に示すように、学校段階が低い方がより「すごくわかるようになった」「少しわかるようになった」と自己評価する割合が高かった。したがって、シニア体験はどの学校段階で取り入れた場合も効果がみられたが、小学校等のできるだけ早い段階から取り入れた方がより有効であることが示唆される。

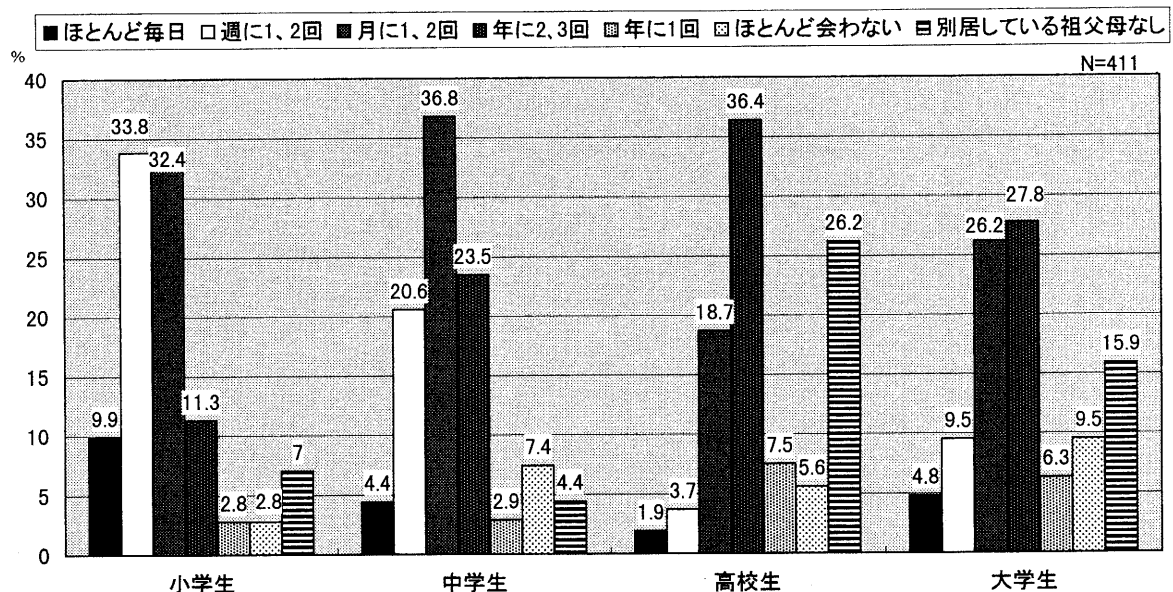


図1 別居祖父母との交流頻度（学校段階別）\*\*\* ( $p < 0.001$ )

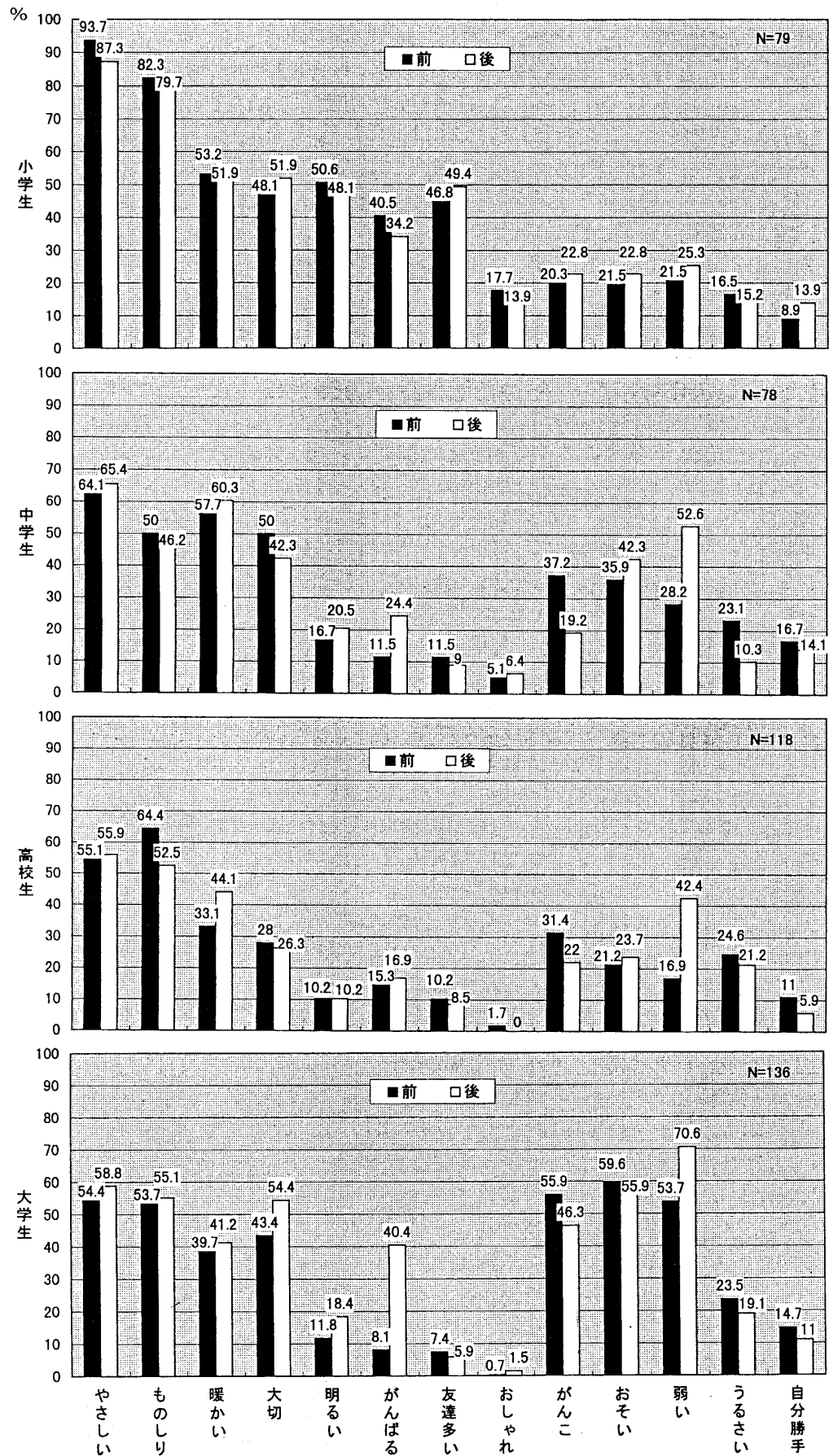


図2 シニア体験前後の高齢者イメージ（学校段階別，複数回答）

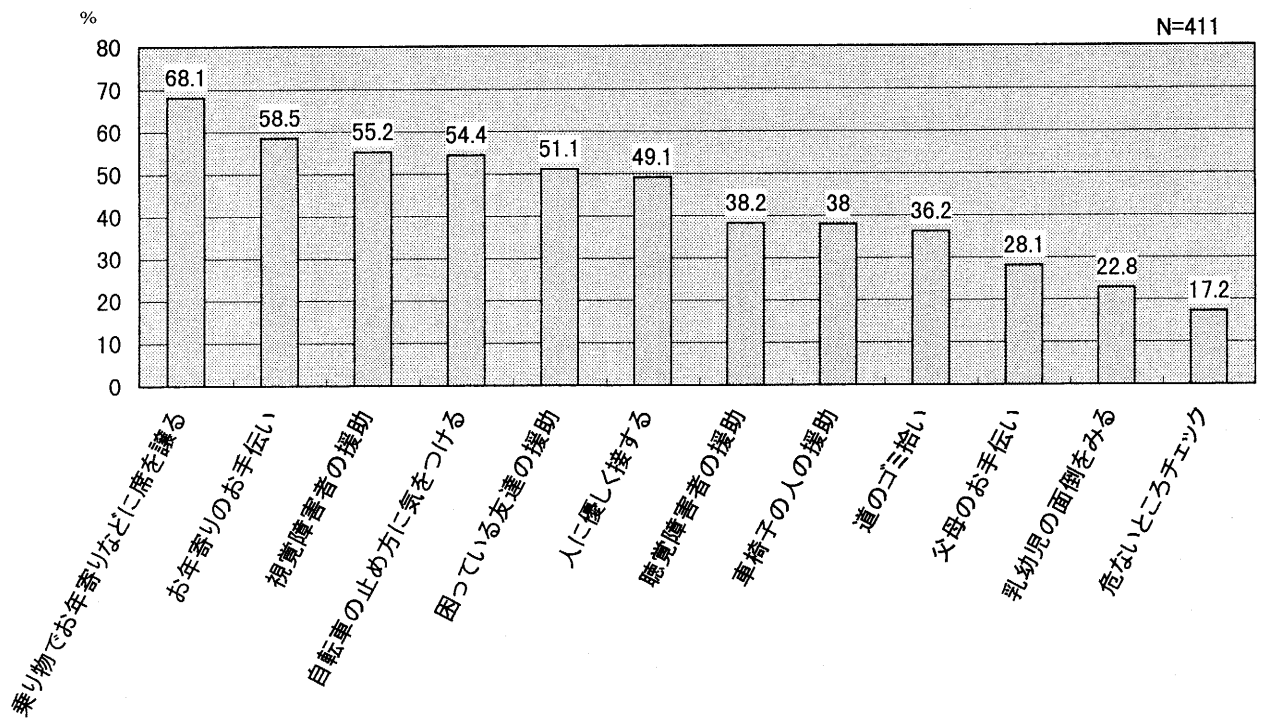


図3 シニア体験後の他者に対する援助意欲（複数回答）

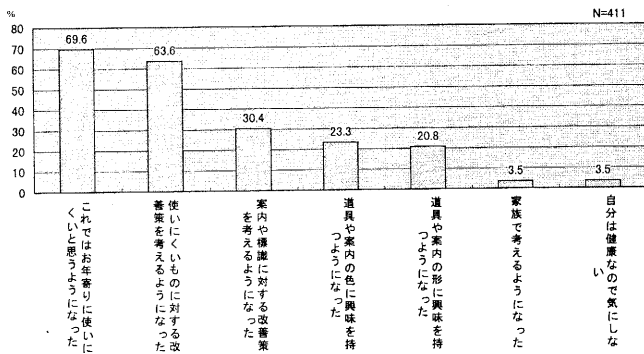


図4 シニア体験後のバリアフリーに対する関心（複数回答）

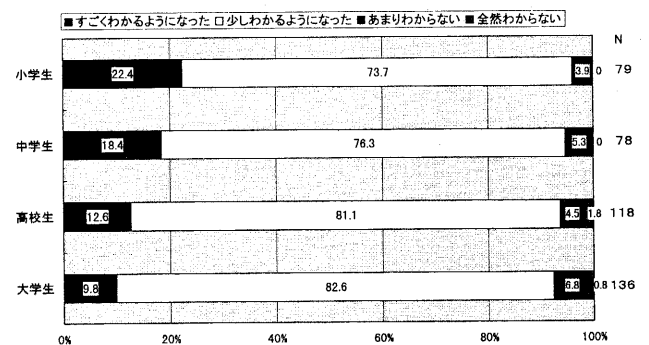


図5 シニア体験後の他者理解度（学校段階別）

## ② 高齢者疑似体験後の自由筆記からの抜粋

・実際に足が不自由な人は毎日車椅子に乗らなくてはいいのだから、不都合やつらいことがたくさんたくさんあると思います。私は、その人たちに何かしてあげたいけれど、いきなりは無理なので、まず空き缶拾いをしたいと思います。道に転がっている空き缶は、私たちはまたげば済みますが、車椅子の人にとっては大きな障害です。だから、それを少しでも取り除いてあげたいです。そして、どんな人にも親切にしてあげたいです（小6女子）

・僕は今まで、老人のことなど本気で考えたことなどなかった。今回、シニア体験をしてみて、人は相手のことをしっかりとわかったうえで初めて人を思いやることができるということを感じた。自分もいずれ衰えるとなると、老人のこ

とを考えて行動していけるよう心がけていきたい。（中3男子）

自由筆記からは、シニア体験を通して、加齢に伴う高齢者の身体的・心理的变化がわかっただけでなく、他者の立場にたって行動することの大切さを学んだことが伺える。

## (2) 高齢者福祉施設訪問交流の効果

### ① 高齢者との交流体験前後での変化

高齢者福祉施設訪問交流の調査対象者は高校2年生である。「祖父母と同居しているか」については、78.8%の生徒が祖父母と「同居している」と回答した。これは前述のように、この訪問交流を授業に取り入れた高等学校が、富山県郡部で祖父母との同居率の高い地域であるためだと考えられる。また、別居祖父母との交流頻度では、図1の高校生のところで

示したように「ほとんど毎日会うか電話する」1.9%、「一週間に1～2回会うか電話する」3.7%、「一ヶ月に1～2回会うか電話する」18.7%であった。このことから、7割以上の生徒は別居している祖父母とはあまり頻繁に交流していないことが明らかである。

図6は、高齢者福祉施設を訪問して高齢者と交流する前と後の高齢者イメージを示したものである。交流前は「ものしり」64.4%、「やさしい」55.1%、「暖かい」33.1%、「がんこ」31.4%等であった。交流後では「やさしい」62.4%、「暖かい」49.5%、「明るい」37.6%等のプラスイメージを持つ割合は増加し、反対に「がんこ」7.3%、「うるさい」0.9%、「自分勝手」4.6%等のマイナスイメージを持つ割合は減少する傾向がみられた。

今回訪問した老人保健施設では、痴呆症や脳血管障害による半身麻痺等の障害をもち、リハビリを行っている高齢者が多かったため、「ものしり」「友達多い」が減少し、「弱い」が増加した。このように交流する高齢者の状況が新たなイメージ形成に影響することから、いろいろな状況の高齢者と接し、多様な理解を促すことも必要であると考えられる。

高齢者との交流で、高校生が印象に残ったとしたことを図7に示す。「お年寄りと話をしたこと」85.3%、「お年寄りの楽しそうな顔」54.1%、「お年寄りの体の不自由さ」40.4%、「施設の方の大変さ」38.5%等で、高齢者の身体の不自由さや施設で働く人の大変さへの思いも認められた。

図8からわかるように、他者理解度では、高齢者との交流を通して他者の気持ちが「すぐわかるようになった」が16.5%、「少しわかるようになった」が78.9%で、合わせて95.4%の生徒が他者理解が深まったと自己評価している。また、図9に示したように、今回のような体験を「またしたい」とする割合が84.3%であり、交流体験に対する手ごたえ

と意欲が伺える。

図10は他者への生活援助意欲について示したものである。交流体験前の他者に対する援助経験では「困っている友達を助けたことがある」割合が53.1%、「乳幼児の面倒をみたことがある」41.7%等であったが、高齢者との交流後には「人にやさしく接していこう」68.9%、「体の不自由な人を助けていこう」46.2%、「お年寄りの荷物を持ってあげるなどの手伝いをしていこう」43.3%等の意欲も伺えた。

高齢者との交流では、自由筆記により、事前に実技を踏まえて学習した「相手の話の聞き方」や、シニア体験で経験したことが役に立ったという声も聞かれたので、系統的な学習がより効果を高めると考えられるが、その検証は今後の課題である。

## ② 高齢者福祉施設訪問交流後の自由筆記からの抜粋

・これから高齢化社会になっていき、こういうボランティアをする機会が多くなると思うので、きちんと対応できるようになっていかなくてはいけないと思う。(高2男子)

・私が施設で出会った方は、耳が遠くて私の話を理解してくれず、とても困った。けれども、その方は話すたびに「耳が遠くてごめんなさいね」と謝られた。話が続かなかった原因は、耳のせいではなく、私のはっきり話さず、友達に話すように話していたことが原因なのだ。私は、今まで人の気持ちをわかっているふりをして、全然わかっていなかった。(高2女子)

高齢者との交流を通して、前述のように高齢者や施設で働く方への理解が深まっただけでなく、自分自身を振り返る機会となったことも自由筆記から伺える。

## (3) 児童福祉施設訪問交流の効果

### ① 幼児との交流体験前後の変化

児童福祉施設訪問交流は、中学生116名、高校生118名を

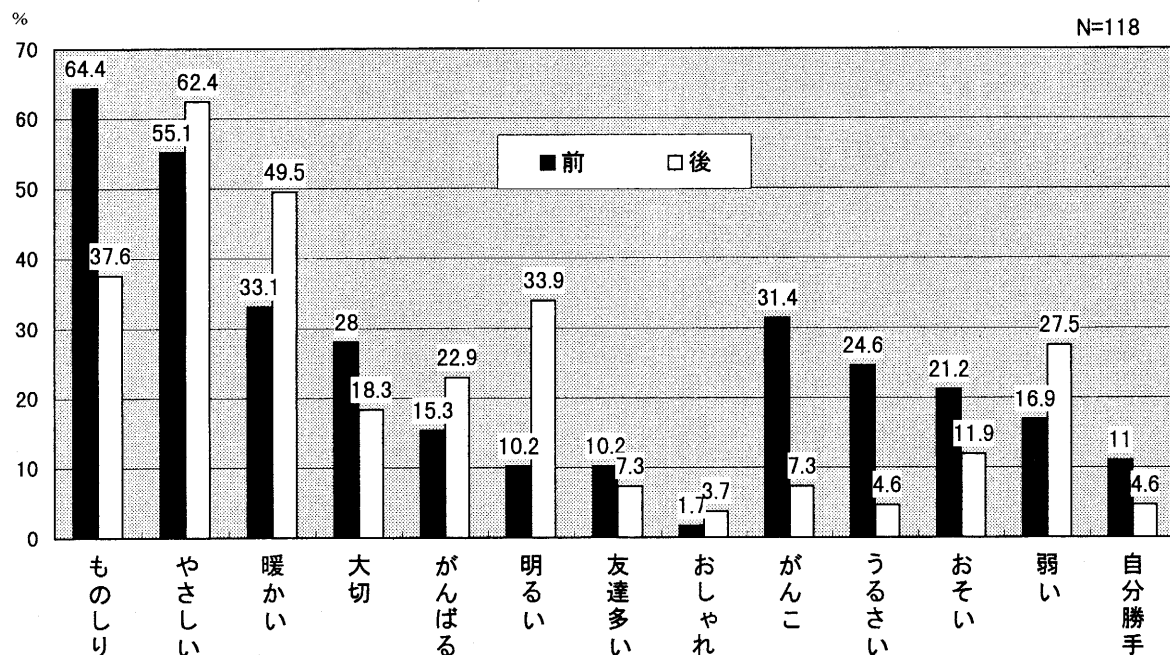


図6 高齢者交流前後の高齢者イメージ(複数回答)



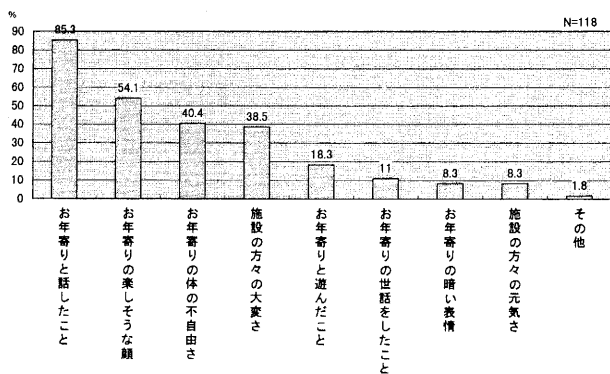


図7 高齢者交流で印象的だったこと（複数回答）

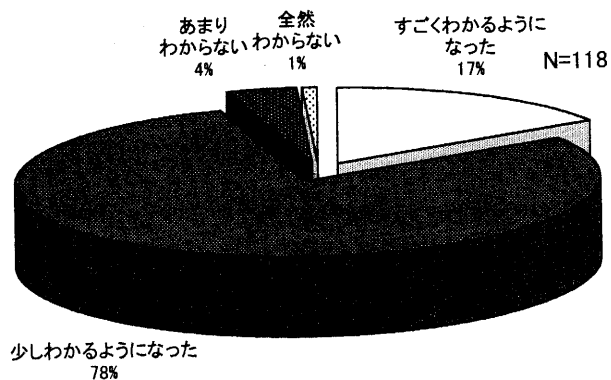


図8 高齢者交流後の他者理解度

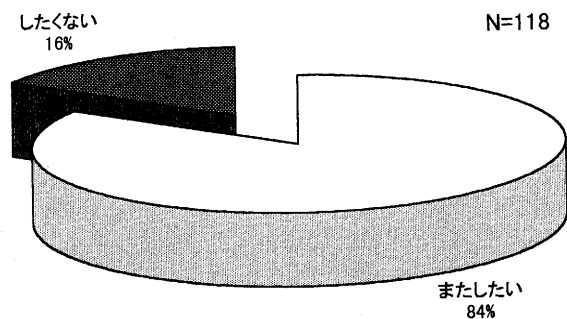


図9 高齢者との交流をまたしたいか

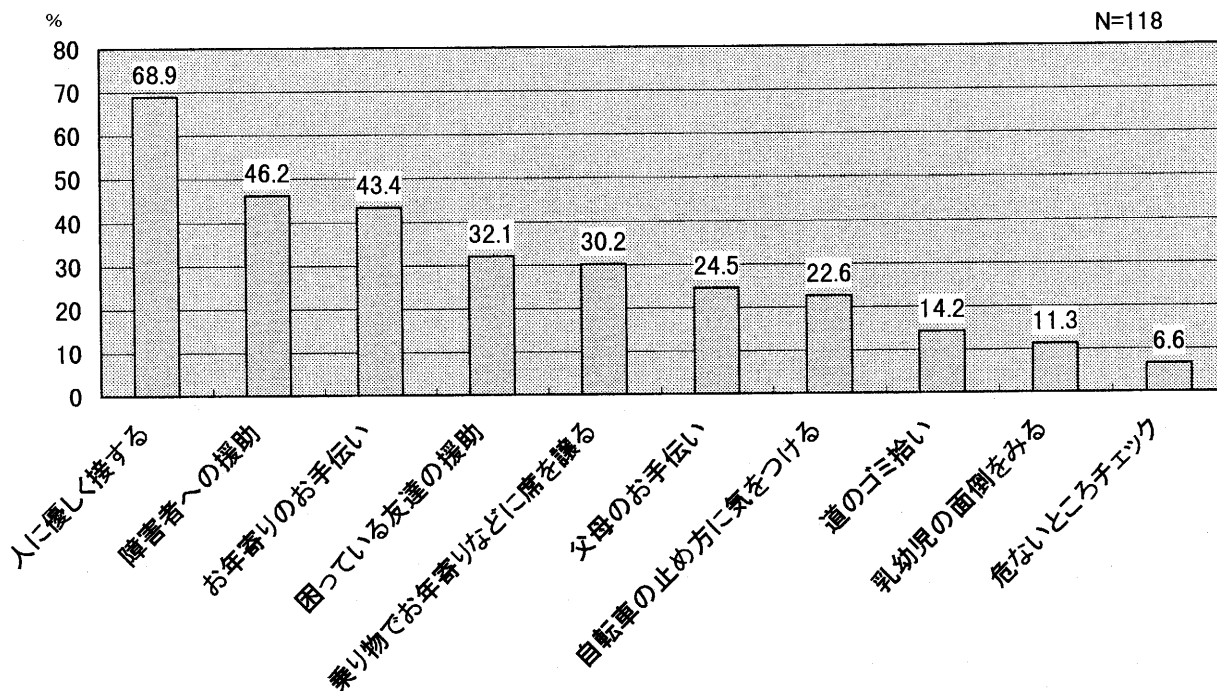


図10 高齢者交流後の他者に対する援助意欲（複数回答）

対象に行った。まず身の回りに乳幼児がいるかをたずねた。図11に示したように「家に乳幼児がいる」と回答した割合はわずか3.1%であり、「近くの親戚にいて時々会う」が24.4%、「近所にいて時々遊んだり話したりする」が6.2%であった。しかし、61.3%の生徒が「身の回りに乳幼児がない」と回答しており、生徒たちは日常生活において乳幼児と交流する機会がほとんどないことが明らかになった。

交流の前後での乳幼児イメージの変化を図12に示す。交流前の乳幼児イメージは「元気」85%、「かわいい」64.6%、「危なっかしい」54.9%、「わがまま」44.7%等であった。

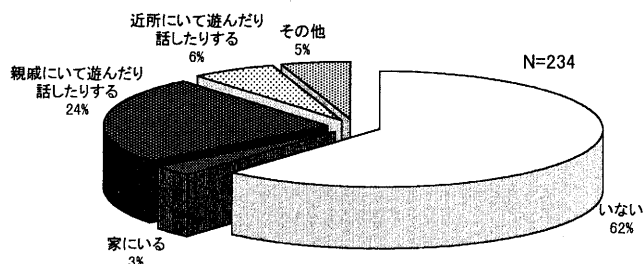


図11 身の回りに乳幼児がいるか

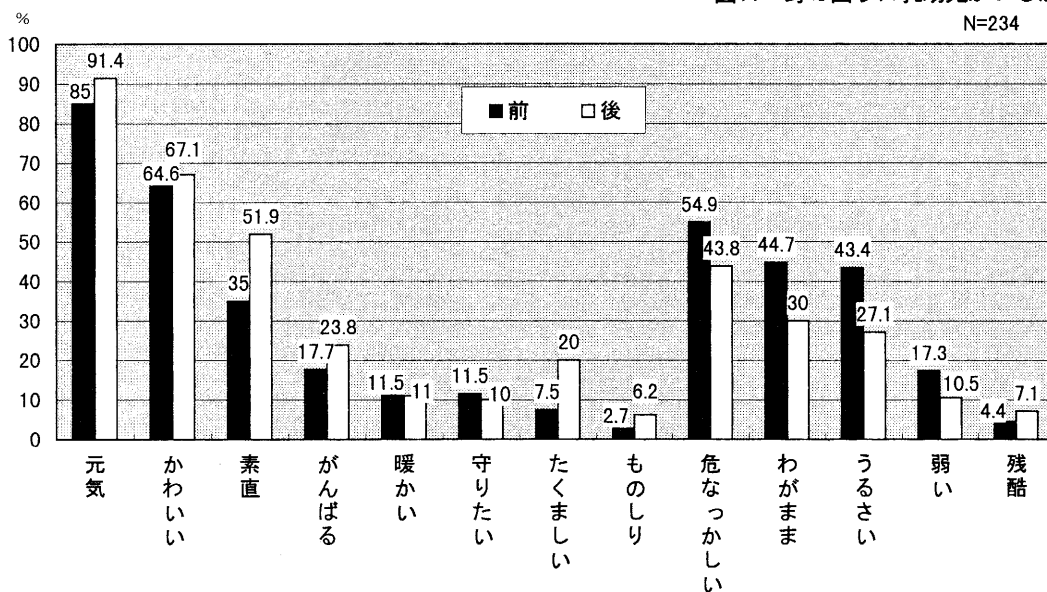


図12 乳幼児交流前後の乳幼児イメージ (複数回答)

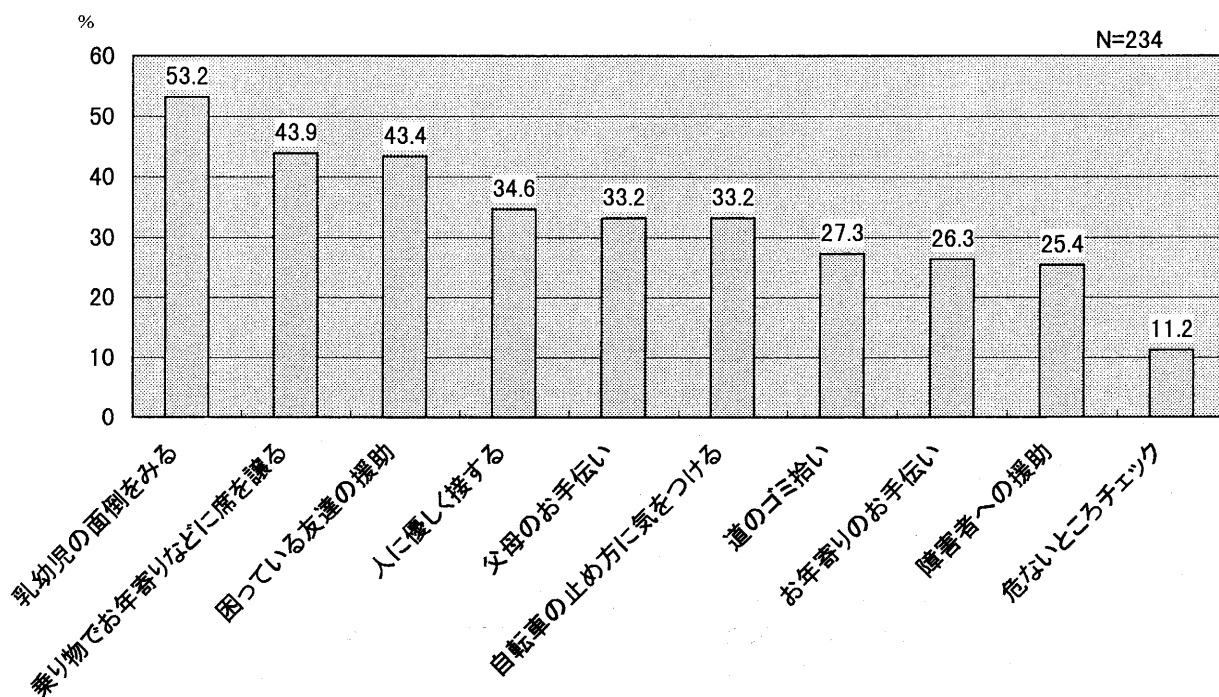


図13 乳幼児交流後の他者に対する援助意欲 (複数回答)



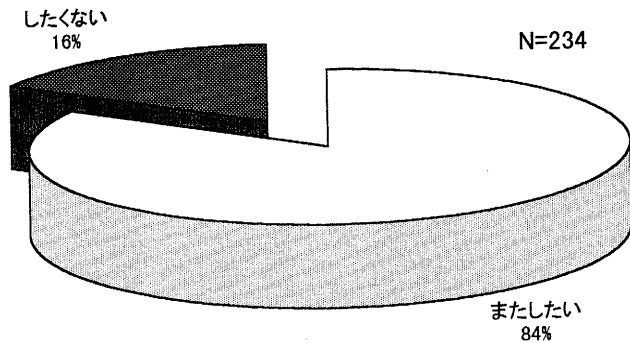


図14 乳幼児との交流をまたしたいか

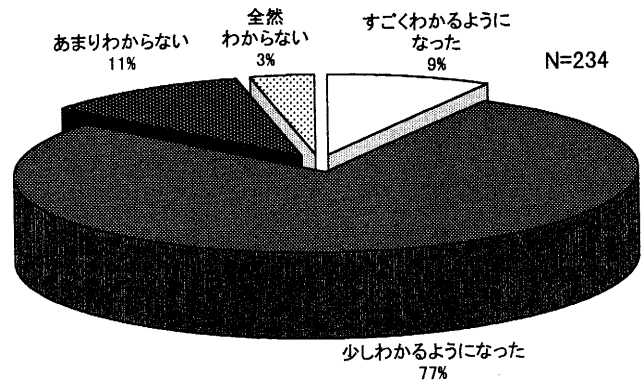


図15 乳幼児交流後の他者理解度

交流後には「元気」91.4%、「かわいい」67.1%。「素直」51.9%、「たくましい」20%等のプラスイメージは増加し、「危なっかしい」43.8%、「わがまま」30%、「うるさい」27.1%等のマイナスイメージは減少する傾向がみられた。

図13, 14に示すように、交流後に「これから乳幼児の面倒をみていきたい」とする割合が最も多く53.2%を占めていた。また、83.7%の生徒が「乳幼児との交流をまたしたい」と回答していた。このことから、生徒たちは交流を通して乳幼児に親しみをもち、これからも積極的に関わっていこうとする姿勢が感じられる。

幼児との交流後の他者理解度を図15に示す。先の2つのシニア体験および高齢者福祉施設訪問交流の体験学習のときと同様に、この交流体験を通して他者の気持ちが「すごくわかるようになった」が8.7%、「少しわかるようになった」が77.4%であった。このように、シニア体験や高齢者との交流後の他者理解度よりはやや低い値であったが、学習効果が認められた。

## ② 児童福祉施設訪問交流後の自由筆記からの抜粋

・今回はあまり幼児のこと、幼児の視点から物事を考えなかったためか、嫌われてしまったので、今度このような機会があったらもっと考えていきたい。(高2男子)

・最初は面倒くさいと思っていたけど、行ってみて自分にも小さかったころがあったのかと信じられない気持ちになった。そんなに小さかった私をここまで大きくしてくれた家族に感謝の気持ちが自然に浮かんできた。(高2女子)

このように、幼児との交流において、生徒たちは幼児に対する理解を深めただけでなく、自分自身や自分を育ててくれた家族を見つめなおす姿もみられた。

## 4 まとめ

今回の調査では、日常生活において児童・生徒たちは、同居の祖父母はいても、同居高齢者以外と触れ合う機会が大変少ないことが明らかになった。また、乳幼児と同居している割合は非常に低く、同居乳幼児以外との交流機会も乏しいという結果が得られた。

今回計画した3つの体験学習(シニア体験、高齢者福祉施設

訪問交流、児童福祉施設訪問交流)の後では、高齢者や乳幼児に対するプラスイメージは増加し、マイナスイメージは減少する傾向がみられた。このことから、体験前のマイナスイメージは体験に基づいたものではなく偏見や知識・理解不足によるものであるところが多いと考えられる。そのため、今回の体験学習を通して高齢者や幼児に対しての理解が深まり、親しみを持てた児童・生徒が多かったと言える。

また、日常生活における同居以外の高齢者や乳幼児との交流頻度とプラスイメージ数との間には関連があり、高齢者や乳幼児との交流頻度が高い人ほどプラスイメージを持っている割合が高い傾向がみられた。このことから、高齢者や乳幼児との交流が、高齢者や乳幼児に対する理解を深め、偏見を取り除くことにつながると考えられる。一方、先行研究と同様に、祖父母や乳幼児との同居の有無と、イメージや援助意欲との関連は見られなかった<sup>5), 6)</sup>。

さらに、体験学習後の段階で高齢者や乳幼児に対してプラスイメージを多く持った人は、これらの体験を通して他者理解ができたとして自己評価する割合が高いという傾向もみられた。また、他者理解ができたとする人は、今後の日常生活場面での他者に対する援助意欲が高まり、このような体験を「またしたい」とする割合も高かった。このことから、他者理解が深まることによって他者を思いやる気持ちが生まれ、それが他者に対する積極的な援助意欲を高めると考えられる。

ただ、交流する高齢者や幼児の状況によって交流がうまくいかなかったためにマイナスイメージをもったり、今回のような交流を「したくない」と回答したりする生徒も若干いたもので、そのような生徒に対してどのように指導・援助していくかが今後の課題である。

体験後の自由筆記からは、高齢者や幼児に対する理解が深まっただけでなく、施設従事者や友達、家族に対する理解も深まっていることが伺えた。さらに、今回の体験学習を通して「人の気持ちを考えられるようになりたい」「外見で人を判断せず、内面もきちんと見られるようになりたい」等、一人ひとりが自分なりの課題を持っており、自分自身を見つめ直す機会となったことも伺える。

これらのように、シニア体験や高齢者福祉施設訪問交流、

児童福祉施設訪問交流という体験を通して、児童・生徒たちは確実に他者理解を深め、他者との交流を通して自己をも見つめることができるようになったと言える。そして、さらに学習の効果として、今後の生活においても積極的に他者を理解・援助していこうとする意欲的な姿勢も伺えるようになった。

以上のことから、直接体験の乏しい現代の子どもたちにとって、今回のような体験学習は、他者を理解し、思いやる心を伸ばし育てる一つの有効な手だてであると考えられる。

しかし、今回行った体験学習の一つひとつが前後の授業との流れをあまり考慮していなかった観も否めない。そのため、ただ「活動して楽しかった」というようにその場限りで終わってしまわないように、今後はその活動を振り返る場を持ちながら継続していくことと、体験学習と理論学習等の系統性を構築することが重要であると考えられる。また、体験学習を含めた授業全体の流れについてもさらに研究を進め、より効果的な福祉教育の内容を提案していきたい。

#### 引用文献

- 1) 文部省初等中等教育局中学校課：「生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について」，1998
- 2) 株式会社社会情報サービス：「アンケート調査集計ソフト 秀吉 for Windows バージョン 1.0」
- 3) 日本子ども家庭総合研究所：「日本子ども資料年鑑第6巻」，KTC中央出版，p.75～77,1998
- 4) 6) 荒井紀子・神川康子・渡辺彩子：「児童・生徒の福祉観・高齢者観とその背景要因（第1～2報）」，日本家庭科教育学会誌第39巻第1号，p.1～14,1996
- 5) 神川康子・渡辺彩子・荒井紀子：「北陸3県の調査による父母・祖父母の生活活動が児童・生徒の福祉観・高齢者観に与える影響」，日本家政学会誌Vol.47 No.7，p.641～649,1996